

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 4

未知との遭遇

鹿島釣狂

釣遊会第4回大会

☆開催日	平成12年7月16日
☆開催場所	庶野港～音調別港
☆入釣場所	境浜（ビクタヌンケ川河口周辺）→岬トンネル裏
☆潮	干潮 20:37 97cm
	満潮 01:51 136cm
	干潮 09:18 13cm
☆釣果	鷹の羽媒 436 mm 1
	アカハラ 332 mm 2
	ハゴトコ 2
	重量 223 0g
	合計 991 点
	成績 6 位
	持ち点 7 点
	累計点 26 点

迷いは深く

釣遊会仲間の島氏が町内会の用事で我が家に立ち寄る。早速、ビールを飲みながら第4回大会の情報を提供していただく。彼が持ち歩くカバンには町内会の文書綴りばかりでなく、釣りに関するファイルがぎっしりと詰め込まれている。その中には島氏の目と足で調べ上げた、取って置きの情報が含まれている。彼が過去の大会の下見で撮影した写真には彼にしか解らないような様々なマークや書き込みがあるが、ビールの酔いが回るにしたがいマル秘事項が明らかになってくる。

大会2週間前の7月2日は大会日と同じ様な潮周りになるので、釣遊会仲間を誘って下見に行くという。休日とはいえ、急に会議等が入ることも予想されるので、「私も連れて行け」とは言えないでいた。

7月1日。地域の『子ども読書会』が職場の施設を使って行なわれた。施設管理のため職場に向かうと島氏の年期の入った（失礼）愛車が通りかかる。夕方7時ころから明日にかけて下見に出かけるという。その時間帯なら特に用事がないので同行を願うと、快諾してくれた。

地域の野球スポーツ少年団『美園スターズ』が全国につながる地区大会の準決勝を栗山で戦っている。差し入れを兼ねて応援に行く。決勝戦の出場を確認して帰って来たのは午後6時。釣り道具を準備する間はなく、一緒に同行する嵐氏と前野氏の釣技を観察することにする。

カジカが少ないこの時期、何を嫁さんにするのが決め手となるので、猿留川でアカハラの様子を伺う。アカハラは小さいが間違いなくいることを確認し、前野氏をサルル覆道前、嵐氏をピクタヌケ覆道前に降ろして、島氏と私は暗い海の探索に駆けずり回る。ギョギョライトの青白い光が見えるところにはその都度立ち寄り、その主に聞いてみるがあまり芳しい応えは帰ってこない。カジカを持っている者は誰もおらず、アカハラとハゴトコのみ釣果である。名人会の名前入りのベストを羽織った御仁に伺うが、結果は同じ。場所替えを頻繁に行っている。

嵐氏のところに立ち寄るとアカハラもアブラコもとれず、タコと格闘中。前野氏は自分のめざす岩に乗っており、私たちの目の前で早速40cm上のアブラコを立て続けに2本上げた。わずかに光明が見えたが、あきらめ状態での帰省となる。私は黄金道路付近の海をじっくりと見るのができただけで幸せではあるのだが……。しかし、釣り人たちの貧果とあまりにも似たような釣り場をたくさん見たせいで、入釣場所の決定についての迷いは一層深まるばかりとなった。

岩見沢に戻ると『美園スターズ』が地区優勝を飾り、全道大会出場権を決めていた。その祝勝会を小学校のグラウンドでやっている。焼き肉にビールが進み、優勝したという勢いもあり、皆口が滑らかで、歓声も上がっている。嵐氏がとったタコと前野氏が釣ったアブラコを差し出す。すぐに腕に覚えのあるお父さんが捌いてくれて、炭火の上に乗せる。どちらもすこぶる大好評であった。

未知との遭遇

いよいよ大会の日がやってきた。皆、入釣場所で悩んでいる。先日の下見で芳しくなかったモイケシヤルベシベツ、谷磯はあきらめ、ピタタヌンケ川でアカハラをとってから岬トンネル裏の盤に出ることに決定する。

境浜には見渡す限り1本の竿も見えない。海が浅いらしく沖から押し寄せる大きな波が砂浜を洗っている。二つの川と川の間で波が少し死んでいて深場と思われる所に早速ゴロ仕掛けを中投する。アカハラ30cmが上がる。続けて25cm弱が7、8本来る。大きいものは見当たらず嫁さんが30cmでは情けないが移動すべきか悩む。

そこにチョコチョコッと来て、竿がグッと押さえ込まれるようなアタリが来た。アカハラの大物を予感し、道糸を少し緩め、次のアタリを待って竿を握る。しばらく間があった後さらにグググッと竿先が大きく締め込まれる。大きく竿を煽り、慎重に寄せる。グングン竿が突き刺さり、波打ち際でさらに大きく引き込まれる。アカハラの大物は波打ち際でばらすことが多いので、波打ち際まで移動し、竿を横に寝せ、寄せる波に合わせて慎重に砂浜に上げる。波が去った後には大きな菱形の黒い塊が残った。

黒ガシラだ。鱭に黒い縞模様が入っている。あわてて魚を抱え込み、持ち場に戻る。針

を外そうと魚を持つが、妙に背中（カレイは背中というのかどうかは知らないが）の鱗がささくれ立ってザラザラしている。白いはずの腹の縁が砂ガレイの様に黄色っぽくなっている。40cmを越えているのに黒ガシラのでっぷり感はなく、身が薄く平べったい感じがする。

移動は簡単

しかし、これで2魚種5匹がそろった。時間を見るとまだ3時である。婿（こうなると嫁と婿の区別はつきにくい）さんのアブラコをとるために岬トンネル方向へ向かうことにする。荷物を全部片付けて、今日初めて用意したキャスターに積み込み移動する。今までは重い荷物を直に担いで移動していたことを考えるとその負担は雲泥の差である。

今回の釣行では嫁と婿をとるために長距離の移動を余儀なくされていたこともあり、釣り具店でキャスターを覗いて見た。2万円を越える立派なものが1台置いてあり購入するかどうか迷ったが、念のため安売り家具店にも立ち寄って見る。そこには私に相応しい安価なものが数種類置いてあった。2980円や1980円の車輪は釣り具店で置いてあったものと同じ大きさで心が動いたが、リュックに付けたときの重さを考えて、結局一番軽く、しかも一番安い（これが私には一番相応しい）980円のものを選んだ。

オジンのやっかみ

岬トンネル入り口にある舟揚場で竿を出す。下見の折に唯一50cm近いアブラコを目撃した場所である。荷物を置いて一息ついた時、昆布とりの準備のためなのかご婦人がやってくる。一応ことわって、舟を出すまでの間、竿を出させてもらうことにする。

「おじいさん、何か釣れたかい」

とご婦人がおっしゃる。今まで、小さい子どもならともかく『おじいさん』と呼ばれた経験などなく、その言葉にムツとしたが、鷹の羽らしき獲物をあげたうれしさもあり、バツカンを差し出す。

「おおっ、おじいさん、いいカレイが上がったね」と『おばはん』が言う。

「カレイはカレイなのだが、何かレイか分かりますか。黒ガシラにしては特徴が違うようで、鷹の羽ではないかと思うんですが・・・。」

「おめえ、これはカレイだ。タカノハではねえ。おめえ、釣りやっているのにカレイも知らんのか〜。」と『おばん』がまたしても意味不明のことを言う。

「だから、カレイの仲間の鷹の羽カレイではないかなと思って・・・。」

「タカノハカレイかなんかは知らんが、いいカレイには間違いなかだべえ〜。昔はカレイも売りもんになったが、近ごろはカレイの漁なんかねえ〜。昆布だけで生活とるけん、わしもカレイの種類はようわからん。」

海で生活している『ばばあ』がカレイの種類も分からないで、よく漁師の嫁さんとしてやってこれたものだとつくづく思い、改めて顔をよくよく見ると、色は煤けているが、張

りがありまだ若いご婦人のようである。私がお婦人の顔をよく覗いたせいかお婦人も私の顔を覗き込み、

「あんりゃ〜。おじいさん、まだ若いんでねえの〜。『おじいさん、おじいさん』って言ってごめんねえ〜。お兄さん、とにかくいいカレイだわあ〜」

『お兄さん』と呼ばれる年でもなく、面はゆい感じはするが言われて悪い気はしない。しばらく、昆布とりの事など話し込んでいて集中できず、手返しが少なく、アタリも全くない。さらに、ドヤドヤッと昆布とりの漁師やその取り巻きが集まり、5時の合図とともに慌ただしく舟が出て行った。

お嬢様

しばらく待ってもアタリはない。釣り人が一人近づいてきた。

「お兄さん、いい蝶が上がったと言う話を聞いたんだが。」

先程の『お姉さん』が言ったのだろう。その『お兄さん』の言葉にうれしくなりバツカンを出す。

「おおっ、鷹の羽だ。昔はここら辺りでよく釣れたもんだが、最近は釣れた話を聞かなくなっただけだ。よく釣れたね。立派。立派。」

最近のこの辺りの状況を開きだし、この舟揚場では無理と判断して、岬トンネル裏へと様子を伺いに空身で出掛ける。岬トンネル前は少し波が高く、時折うねりもあるが、潮が引いてきたこともありやれるであろう。舟揚場に戻ろうとすると、昆布取りの舟も戻ってくる。まだ1時間も経っていないのにも思いながら慌てて駆けたが、今一步のところでは及ばなかった。1本の竿は引きずられ今にも海に入り込もうとしているので、手に持つと、すぐにキーンと糸鳴りがしてブツーンと切れてしまった。もう1本は海中を漂っている。

「おめえー、だんめだあー。邪魔なんだわー。どけてけるおー。」

「すいませーん。」と大きな声で謝ると、先程から話し込んでいた『お嬢様』が糸を持ち、竿を引っ張り上げてくれた。漁師は舟にいっぱい積み込んだ昆布を下ろすと、再び一目散に沖に出て行った。天候があまり芳しくないこともあり、少しの晴れ間を見て素早く干すためにもって来たものと思われる。今日の昆布とりは5時から7時までの2時間である。

岬トンネル前

あわてて竿を片付け、岬トンネル前の切り立った岩の上から竿を出す。前にも岩があり打つところは限られており、しかも、時折来るうねりに昆布が大きく動き、それに合わせて竿が落ち着かない。アタリもなく、またまた場所を少し左の方に移動する。少し浅いが昆布やホンダワラがびっしりと生えており、その中に遠・中・近と仕掛けを振り込む。間もなくハゴトコが上がる。昆布の中で育ったと思われる赤黒いハゴトコばかり次々と釣れるが、本命のアブラコが来ない。締め切り時刻まで粘るが、とうとうアブラコが1本も来ずに終わった。仕方がないので、審査に提出する5匹は、婿がタカノハ、嫁はアカハラ、

そして残りを比較的でっぷりと太ったハゴトコ3匹とした。

審査結果

審査の結果は

優勝	佐々木 秀美	1438点 (アブ 469+カジ 436+5310)	オンコの沢
準優勝	吉井 博	1323点 (アブ 426+アカ 379+5180)	オンコの沢
3位	嵐 光博	1238点 (アブ 455+アカ 370+4130)	目黒
身長賞	岡 英成	45.6cm アブラコ	オンコの沢

であった。

重量では優勝から3位までの3名ともオンコの沢組である。そして4位が前野氏、5位が嵐氏でこれはサルル組である。そして私は991点(鷹の羽 436mm+アカハラ 332mm+重量 2230g)で6位入賞となった。

3回大会までのカレイの年間大物賞は、大前事務局長が歌島であげたクロガシラ36cmであったがそれを抜き、私が戴くことが濃厚になりつつある。大前氏は昨年引き続き年間大物カレイ賞をねらっていたようであるが、私の鷹の羽を見てしきりに悔しがると自分が大物を釣った喜びはもちろんであるが、競技であるので、他のメンバーが悔しがるところを見るのもなかなかの喜びではある。今までは、誰の釣果を見ても自分の喜びとすることができたのだが、釣り会に入って性格が悪くなったのではなかろうか。他の人釣場所を選んだ釣遊会のメンバーはほぼ全滅の状態であった。

オジンのいで立ち

昼食は、えりも町のラーメン屋でとる。祝勝会をかねて生ビールで疲れを癒す。ビールがなかなか出てこないのが吉井氏がしびれを切らして店主に一声かけると、75歳になる白髪頭の店主が準優勝の吉井氏に向かって『おじさん』とくる。吉井氏がいつもはかぶっているはずの帽子を脱いでいたこともあり、頭だけで判断したのであろう。すかさず前野氏が『その頭ではなあ〜、おやじが言うのも無理ないわ』吉井氏の頭はともかく顔の色艶は誰にも負けない若者なのだが……。私も今日のくだんのお嬢様の一件があり、ひとごとではないぞと思う。最近ルアーマンやフライマンはともかく磯釣り師にもスマートないで立ちの者が多くなってきたが自分の格好と言ったら、いわゆるダサイ状況のオジンである。

自宅に戻り、タカノハの説明を女房にしても、どれだけ貴重な魚を釣り上げたのか、そして、それを釣り上げたご主人様はたいしたものだということが理解できず、ただただ私の



自己満足に終わってしまった。そして、墨や和紙まで購入しに行くものだから、呆れ果てた女房が言った言葉が

「カレイには違いないしょ。早く刺し身にして一杯やったら」

それに反論して私が言う。

「いつも必ず父の釣果を聞いてくれ、写真も撮ってくれる娘が帰ってきてから魚を捌く」

夜遅くになって部活から帰ってきた娘に女房に言ったことと同じことを自慢してから刺し身にしたが、その量の多いこと。家族では食べ切れないで残してしまう羽目になった。次回大会もさらに娘や女房を唸らせる大物をと夢見ながら床についた。

追伸

岬トンネル裏では私の他に二人の釣り人がいたがそのどちらかが植村年春氏であると推測される。2000年9月号の『北海道の釣り』の「釣り会通信」覧に植村氏の記録が載っていた。遊鱗会第8回大会7月16日岬漁港～十勝港の成績である。(身長賞)植村年春アブラコ46.2cmとある。又『釣りは異なるもの』の稿には氏は岬トンネル裏に入釣する事が多いとある。

植村氏の玉稿と釣り会成績覧からすると、確かにこの日(7月16日)にここに植村氏がいたことになる。氏の文章からすると、私に声をかけてきた御仁とは違うと思われる。すると、岬トンネル裏の出岬と砂場の境で釣りをされていて、私とその日の釣りのことを尋ねた御仁が植村氏となる。年配ではあったが素早い動きで場所を移動していた事を考えると、植村氏が連載の中で述べられている氏の肉体をかなり謙遜されているのが推し測れる。あの動きは氏が述べている「よっこらしょ」と言うものではなかった。

